平城宮出土「難波津の歌」墨書土器

表5　平城宮跡出土　「難波津の歌」墨書土器

No.	出土遺構	釈　文※1	器種	墨書箇所	集成※2
1	第7次 SE311B	□□佐／□奈尓／□□□□	土師器 ⅢA	底部外面	Ⅰ-14
2	第21次 SD2700	奈尓／佐久□／九丶八十一	土師器 高杯	杯部外面	Ⅰ-130
3	第32次 SD4951	□尓波都尓／（戯書）	土師器 杯A	口縁部～ 底部外面	Ⅰ-628
4	第274次 SD4951	［久ヵ］［乃波ヵ] 尓佐□・・・□□奈	須恵器 杯B蓋	頂部外面	Ⅲ-895

※1　今回、史料調査室により再読
※2　『平城宮跡出土墨書土器集成』の巻号と掲載番号

はじめに

最近、難波津の歌が記された資料の発見があいついでいる。滋賀県湯ノ部遺跡[1]や徳島県観音寺遺跡[2]、藤原京左京七条一坊SG501（藤原第115次[3]）、平城宮第一次大極殿院西外郭SD3825A[4]（平城第316次）などより出土した木簡は記憶にあたらしい。

2002年度刊行の『平城宮跡出土墨書土器集成Ⅲ』（以下『集成』と略称）の編集にあたり、平城宮出土の墨書土器を再整理したところ、新たに難波津の歌を記した墨書土器（2、4）が見つかった。平城宮跡出土墨書土器で、難波津の歌と判断できる墨書土器は4点となった。

土器と時期について

1と3は、かねてから難波津の歌の一部を記したものと指摘されていた。これらについては、東野治之氏[5]や川崎晃氏[6]の論考に詳しい。

1は大膳職推定地南辺の井戸SE311Bより出土。c0手法の土師器ⅢAで、口縁端部の巻き込みは細く、平安時代初頭の様相を呈する。SE311Bは土器編年平城Ⅶの指標となる遺構で、825年頃に埋没したと考えられている。

3はc0手法の杯A。口縁端部内面に油煙の痕跡がみられる。東一坊大路西側溝SD4951より出土。調整手法などから平城Ⅳ～Ⅴに属すると思われる。

2は『集成Ⅰ』に集録された資料であるが、難波津の歌の可能性があるとして、史料調査室に再読を依頼した。内裏東外郭と東方官衙の間の基幹排水路SD2700より出土。難波津の歌の断片とともに、九九が記されている。内面は撫で調整のみで、外面は削ったのち、粗い磨き調整が施されている。調整手法から奈良時代後半であろう。

4は『集成Ⅲ』集録の資料。式部省東方・東面大垣の調査で、東一坊大路西側溝SD4951より出土。溝は奈良～平安時代まで存続しており、詳細な時期は不明。須恵器杯B蓋の頂部上面に、時計回りに「…尓佐久…乃波奈…」と記し、内側にもう一巡して歌の続きをまわすようである。また、つまみに11本の針書きがあり、12文字の割付けにみえる。厳密に等間隔ではないが、おおむね文字の位置にあたる。

結　語

『集成』に集録された墨書土器の点数は、第316次調査までで3232点にのぼる。明らかに習書された資料は約60点、うち4点に難波津の歌の一部が記された資料がみられたことになる。木簡の資料と合わせても、出土地点に偏りはない。平城宮内でも手習いとして難波津の歌が浸透していたことを物語る。その他、断片的であるが、難波津の歌の可能性がある資料もあり（Ⅱ-355など）、今後、さらに難波津の歌を記した木簡や墨書土器が見つかる可能性もある。

（神野　恵）

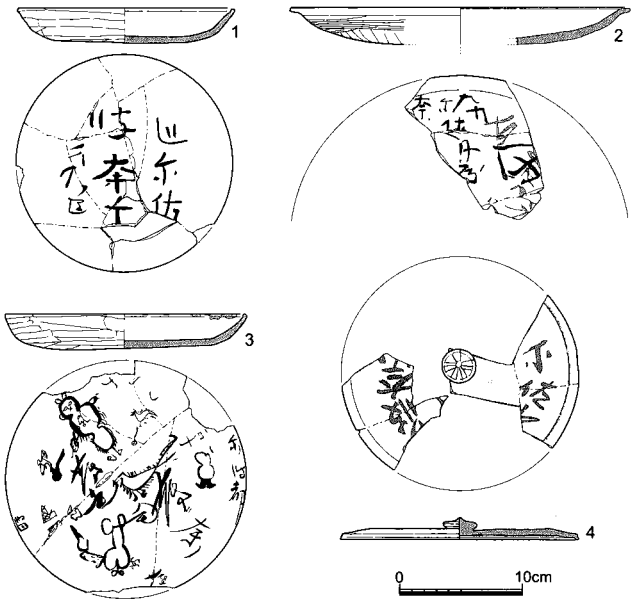

図32　平城宮跡出土　「難波津の歌」墨書土器　1：6

1）瀬口眞司・藤田琢司「滋賀・湯ノ部遺跡」『木簡研究』第19号 1997
2）和田萃「Ⅳ 木簡の観察と釈文」『観音寺遺跡・（観音寺遺跡木簡篇）』2002
3）『藤原木簡概報（16）』103　奈文研 2002
4）『平城木簡概報（36）』37　奈文研 2001
5）東野治之『日本古代木簡の研究』塙書房 1983
6）川崎晃「「越」木簡覚書」『高岡市万葉歴史館紀要』第11号 2001